

ディケンズ作品全 20 冊，三回目読了雑感

After Reading Twenty Volumes of Dickens' Works for the Third Time

清水 英秋

Hideaki SHIMIZU



僕は 2003 年に都立高校を定年退職しました。年々激しくなっていく校務の多忙化と部活の濃密化の中で、僕の心は「勉強したい」と激しく叫んでいました。37 年間の教職経験のなかで底辺校勤務が多く、自分の勉強はおろそかになっていました。英文の活字に飢えていました。退職とともに「学生に戻ろう」と決心しました。本棚にはほりをかぶっていて学生時代に読み残した本を片端から読み進めました。主にアメリカ文学です。40 年も前のペーパーバックです。紙質疲労で 1 枚 1 枚はがれていくような状態ですが、丁寧に辞書を引いて読み進めました。50 数冊読んだところで、「さて」と本棚をざっと見渡すと故問^{はざま}二郎先生翻訳の『我らが共通の友』（ちくま文庫・全 3 巻）が目飛び込んできました。問先生は僕の高校の恩師です。先生がこの本を出版なさった時に寄贈してくれたものです。僕は懐かしくて嬉しくて、すぐに丸善に飛んで行きました。翌日から僕の孤独で厳しいディケンズ修行が始まりました。文体の重厚さや難解さはディケンズと同時代人のアメリカの作家メルビル（『白鯨』）やホーソン（『緋文字』）で知っていましたが、圧倒的なボリューム（ペンギンクラシックで約 800 頁）と多人数の登場人物が複雑に絡み合っていて最後の大団円までもってゆくとい

うミステリー仕立ての構成には全く驚かされました。読後感は爽快で、最後まで読みきったという達成感で一杯でした。早速、問先生に読書報告を送りました。先生からは 'A bolt from the blue! which gratefully shocked me' と返事があり、「ここしばらくは TTC の 'buried deep' の心境でしたがなにやら 'dug up' の思いあり」と続いていました。また「OMF については“読んで”もらえた事を嬉しく思います。ディケンズとともに訳者として感謝します。全巻（まして原文で）読み通す人は、手に入れた人のせいぜい十分の一くらいかと思っていますから」ともありました。この言葉が嬉しくてこの後次々と読み進む原動力になったと思います。

問先生は僕の高校時代に、授業の合間にディケンズに関する色々な話をしてくれました。その中で一番印象に残っているのはコーヒールームの話です。「店に入ってな、内側からガラス窓を見るとこう見えるだろう（と言って黒板に大きく 'MOOR EEF' と逆文字を書く）。ディケンズはこれを見てぞっとするような不思議な感覚を味わっていたんだ」。僕はこの話の出所を知りたくて、コーヒールームの場面になるとドキドキしながら読んだものでした。しかし数多くのこの場面がありながら、この出所には遭遇できませんでした。

1 回目読みが終わって、『ディケンズとともに』（小池滋著・晶文社）を読んで、これはフォースターの『チャールズ・ディケンズ伝』の中の記述だと分かり、胸のつかえが下りました。

6 冊目の『骨董屋』の読後感で「最後に老人ではなくネルを死なせてしまった作者がうらめしいです」と書き送ったところ、「ネルの死を悲しがってくれるのは、1842 年港でディケンズの米到着を待っていた当時のアメリカ人と同じですね」という返事がありました。僕は、これは『アメリカン・ノーツ』に載っているに違いないと思い、わくわくして同書を読みました（15 冊目）。しかし、見つけませんでした。これも伝記の中の記述でしょうか。

先生のこういう返信もありました。「あなたが 30～40 の世代をしっかりと読み込むことに使っていたら、おそらく……と惜しい気もしますが、研究職ならぬ教育職の人生を歩んだのも……」。僕は自分の高校教師としての 37 年間の人生を決して後悔はしていません。むしろ他の人の数倍は働いてきたと自負さえしています。しかし、この「しっかりと読み込む」という言葉は僕の心に深く残りました。そこで僕は自分を「辞書引き職人」と規定して、10 冊目の『ニコラス・ニッケルビー』と 11 冊目の『ボズのスケッチ集』で単語ノート作りをして、僕自身のための‘DICKENS GLOSSARY’（第 1 集）を作り上げました。続いて 16 冊目の『マーチン・チャズルウィット』と 17 冊目の『ドンビー父子』で第 2 集を、そして残りで第 3 集を作り上げ、最後にその合本を約 60 ページにまとめあげました。付録として「仕事の種類」、「馬車の種類」、「ゲーム」、「植物名」、「動物名」、「アルコール飲料」を採集し

ました。

「仕事」は 163 種類採集、頻度数の順に 10 個挙げると、‘chandler’（雑貨商、ろうそく製造販売業）、‘huckster’（呼び売り商人、行商人）、‘costermonger’（果物・野菜などの呼び売り商人）、‘haberdasher’（紳士用装身具商、小間物商）、‘hatter’（帽子製造人、帽子屋）、‘milliner’（婦人用帽子屋）、‘lamplighter’（街灯点灯夫）、‘carter’（荷馬車屋）、‘pieman’（パイ売り）、‘wheelwright’（車大工、車両製造人）などです。

「馬車」は 23 種類採集、10 個挙げると、‘chariot’（2 頭立て 4 輪軽馬車）、‘phaeton’（2 頭立て幌付き 4 輪馬車）、‘cabriolet’（1 頭立て 2 輪折りたたみ式馬車）、‘gig’（1 頭立て 2 輪軽馬車）、‘barouche’（2 頭立て幌付き 4 人乗り 4 輪馬車）、‘fly’（1 頭立て有蓋軽馬車）、‘hansom cab’（1 頭立て 2 輪軽馬車）、‘chaise’（1 頭立て 2 輪軽馬車）、‘omnibus’（3 頭立て乗合馬車 22 人乗り）、‘brougham’（1 頭立て 4 輪箱馬車・御者台が外にある）などです。

「ゲーム」は 35 種類採集、10 個挙げると、‘skittle’（木製の円盤または球を投げて、9 本のピンを倒す）、‘whist’（2 人 1 組の 4 人でやるトランプ遊び）、‘backgammon’（西洋すごろく、2 人でする盤上ゲーム）、‘cribbage’（2～4 人で行い、各競技者が捨てた 2 枚の札を親が自分の持ち札にできるトランプゲーム）、‘blind man’s buff’（目隠し遊び）、‘billiard’（ビリヤード）、‘bagatelle’（盤上で行う玉突きの一種）、‘leapfrog’（馬跳び）、‘rubber’（トランプの三番勝負）、‘piquet’（2 人用のトランプゲーム）などです。

「植物」は 116 種類採集、10 個挙げると、‘bramble’（イバラ、野バラ）、‘honeysuckle’（‘woodbine’；スイカズラ）、‘buttercup’（キンポウゲ）、‘fig tree’（イチジク）、‘geranium’（ゼラニ

ウム), 'ash' (トネリコ), 'mignonette' (モクセイソウ), 'nettle' (イラクサ), 'thistle' (アザミ), 'yew tree' (イチイ) などです。

「動物」は 94 種類, 10 個挙げると, 'magpie' (カササギ), 'partridge' (ヤマウズラ), 'hedgehog' ('porcupine'; ヤマアラシ, ハリネズミ), 'dormouse' (ヤマネ), 'blackbird' (クロウタドリ), 'goldfinch' (ゴシキヒワ), 'linnet' (ムネアカヒワ), 'lynx' (オオヤマネコ), 'pheasant' (キジ), 'sparrow' (スズメ) などです。

「アルコール」は 30 種類, 10 個挙げると, 'grog' (ラム酒の水割り), 'brandy and water' (ブランデーの水割り), 'negus' (ぶどう酒に湯と砂糖とレモンと香料を加えた飲料), 'gin and water' (ジンの水割り), 'claret' (ポルドー産の赤ぶどう酒), 'Madeira' (ポルトガル領マデイラ島産の薄色のデザートワイン), 'porter' (焦がした麦芽を使った黒ビール), 'shrub' (果汁・砂糖などにアルコールを加えた酸味のある飲料), 'flip' (ビール・ブランデーに鶏卵・香料・砂糖など加えて暖めた飲料), 'julep' (ウイスキーなどに砂糖・ハッカ・氷を入れた酒) などでした。

僕から間先生への最後の読書報告は 2007 年 8 月末でした。その手紙の中で僕はディケンズ・フェロウシップに入会出来た事を、喜びを込めて報告しました。そして「なりたての若造のディケンジアンから尊敬する大御所のディケンジアンへ」と結びました。奥様が大声で病床の先生に読んであげると先生は嬉しそうにしていたとお手紙をいただきました。9 月初めに大型の台風が日本列島を縦断しました。先生の魂はその台風に乗って懐かしい仙台に帰ったのだと僕は思いました。先生には沢山学びたいことがあった。一緒に酒を飲ん

で肩を叩きながら大声でディケンズを語りたかった。このショックで僕の 2 回目読み (今度は発行年代順に読むことにしました) は、張り合いがなくなって、気合が入らなくて、「難しいな、難しいな……」の気持ちばかりを引きずって、1 回目読みの時よりも大幅に時間がかかりました。

さて、全 20 冊を三回読み通して、いくつか気がついた事があります。その一つは人名の読み方の難しさです。恥ずかしい話ですが、ロマン・ポランスキーの映画『オリバー・ツイスト』を見たとき、ロンドンのスリの親玉をフェイギンと呼んでいるのをみて、僕はハッとしました。僕は二回も読んでいながらファギンと発音していたのです。BBC 製作の『荒涼館』をテレビで見たとき、エスターの後見人はジャーディスではなくてジャーダイスと発音されていました。『ニコラス・ニッケルビー』読後の間先生への読書報告で「Madeline の発音を僕はメイドリンと読んでいましたが、ニッケルビー夫人が間違えて Magdalen と発音したのを考えるとマドラインと読むのかなとも思いました。どうでしょう」と教えを乞いました。先生からは「エブリマンの発音辞典によると (マドリン, マデリン, マデライン)。マデライン (2005 年, 田辺訳) くらいがいいところかと思います」との返事でした。『ディケンズ鑑賞大事典』の付録 CD-ROM では『互いの友』の登場人物をボズナップと記述し、間二郎訳の『我らが共通の友』でもボズナップと記述されていますが、『大事典』の作品解説ではボドスナップとなっています。カシオの電子辞書ではパドスナップ (リーダーズ英和辞典, 研究社) です。『大事典』の作品解説が正しいかなと思います。人名ではありませんが、『デイヴィド・

コッパフィールド』(13章)でデイヴィッドがドーヴァーの大叔母を頼ってとぼとぼ歩いてゆく場面があります。デイヴィッドは古着屋で自分の‘waistcoat’(ベスト)を売ろうと交渉します。古着屋のおやじはこれを‘weskit’と発音します。僕はウェストコウトと丁寧に発音していましたが、当時はウェスキットまたはウェスカットぐらいが一般的な(少なくとも一般民衆の間では)発音だったのでしょね。

またいくつか間違いも発見しました。カシオの電子辞書の『ジーニアス英和大辞典』(大修館)には「artful dodger 策士・世渡り上手 (Charles Dickens の *David Copperfield* (1849) 中の作中人物から)」とあります。これは明らかな間違いです。*Oliver Twist* (1839) とすべきです。また『ディケンズ鑑賞大事典』の付録 CD-ROM の『バーナビー・ラッジ』の「あらすじ」の項で「ジョーゼフ・ウィレット アメリカ独立戦争で左足を失し」とありますが、ジョーが失ったのは左足でなく片腕でした。また「あらすじ」に「ジョー・ウィレットは、恋人の間を行き来するのはやめるようにと言って息子の自由に干渉するようになった父を拒否するようになる。その一方でジョーは自分のことでも悩みを抱えていた。彼はドリーの近くにいたいがため、鍵屋に徒弟として[働いて]いたが、ヴァーデン夫人によってドリーとの仲を引き裂かれ、失望し、軍隊に入り、アメリカで反逆者たちと戦うため出かけると宣言する」とありますが、ジョーは鍵屋の徒弟にはなっていませんし、ヴァーデン夫人は二人の仲を引き裂くという積極的な行為はしていません。『ディケンズ鑑賞大事典』の作品解説の『アメリカ紀行』(157頁)には次のようにあります。「西

部からの帰路は、シンシナティーまで戻り、そこから馬車でオハイオ州コロンバスを抜け、エリー湖へ向かった。途中オハイオ州北部の奥深い森で馬を替えるため小休止したディケンズは、そこにいた2人の娘も自分の作品を読んでいたことを知らされ、感銘を受ける。ディケンズの名声は辺境の一軒家にまで及んでいたのである」。実際は、奥深い森のインディアン村で一泊したあと、ディケンズはサンダスキーからバッファロー行きの蒸気船に乗り込む。その蒸気船の中で、一人の紳士が妻に話しかけるのを部屋の間仕切りを通して聞いたのである。「ねえお前、ボズは今もなおこの船に乗っているんだよ」。「ボズはまもなく本を書くだろう。我々みんなの名前を出してね」ということで、2人の娘から直接聞いた話ではなかったのです。同じく『大事典』の付録 CD-ROM のあらすじの項の『デイヴィッド・コッパフィールド』から、「ミコーバー氏は一家を引き連れてオーストラリアへと船出する。同行するのはペゴティー氏とその姪エムリー(ステイアフォースに捨てられて長い苦難の末、悲嘆と後悔の身を伯父の手に委ねた)、連れ合いバーキスを失った妹のペゴティー、その他、船は赤い夕日の水平線に消え、ケントの山々とデイヴィッドの身辺を包む。」同行したのは妹のペゴティーではなくてガミッジ夫人(Mrs Gummidge)でした。

第3ラウンドを読み始めた時、「学生に戻る」と決心した以上徹底してやれと思って、単語カード作りを始めました。およそ800枚のカードを4つの山に分けて、毎日一山づつめくっています。「受験生みたい」と自分で笑いつつ、69歳の化石頭でもまだ新しい単語が覚えられる事に感激しています。

2005年8月に読み始め、全20冊第3ラウンドを読み終わったのが2011年8月。丸6年かかりました。最初は肩を張ってうんうん言いながら自分を叱咤激励し、体力と根性だけで読み進みましたが、今は少しは面白さ楽しさを楽しみじみ味わう余裕も出てきました。

『オリバー・ツイスト』の中で、オリヴァーが二人のスリの先輩と初めての「仕事」に出て、見つかってひたすら逃げるあの場面が忘れられません。ディケンズ自身が声を上げて、ドンドン逃げる足音、群集の中をドンドン追いかける足音を短文でたたみかける、そのさまが目に見えるようでした。‘“Stop thief! Stop thief!” There is a magic in the sound. The tradesman leaves his counter, and the carman his wagon; the butcher throws down his tray; the baker his basket’ こんな調子で丸々1ページも続くのです。

『デイヴィッド・コッパフィールド』のヤーマス海岸の大嵐の場面の圧倒的な迫力(筆力)は忘れられません。嵐の海岸でスペイン船が難破しかかっている。沈みかかった船のマストに人がしがみついている。海の男たちも手が出せない。ハムがロープを体に巻いて荒れ狂う海に飛び込む。波に翻弄され、大波にのまれ、マストの男とハムが海岸に叩きつけられる。二人とも死んでいる。(なんとマストの男はスティアフォースだった。ハムの婚約者エムリーを強引に連れ去った男だ。可哀相なハム。男らしく勇ましいハム。)

『マーチン・チャズルウィット』のジョーナスの森の中での殺人場面と工作をしておいた自分の部屋に帰り着くまでの心の葛藤、この心理描写

のドキドキ感は恐ろしいまでの迫力がありました。

『荒涼館』の中で、バケット警部とエスターが雪の中を馬車でエスターの本当の母であるデッドロック夫人を追跡する。必ず探し出すという警部の強い意志と「生きていてください」というエスターの切ない願いが合わさって、読者の心を揺さぶります。この場面は2回目、3回目と読んでも文面から目が離せませんでした。

『バーナビー・ラッジ』と『二都物語』の群集の暴力破壊場面も物凄い迫力で忘れられません。

『ドンビー父子』で息子を失くしたドンビー氏が傷心の旅に出る、その列車の単調なゴトンゴトンという音が音楽的な印象で耳に残る。思わず「鉄道唱歌」を口ずさみたくなる文章です。カーカーが夜突然の轟音に驚いて外に飛び出すと機関車の動く音だった。その機関車にひき殺されるカーカー。今度は機関車の轟音は「死」の象徴でした。

最後に『互いの友』の最初の場面です。テムズ川でリジー・ヘクサムが船を漕いでいる。父が暗い水面をじっとくいているように見つめている。この暗い静寂の場面が物語の開幕にふさわしいと思い、とても気に入っている場面です。

僕は研究者でなく、物語を楽しく読むのが好きな一介のディッケンズファンですが、ディケンズに出会えて本当によかったと、今しみじみと思っています。

(‘DICKENS GLOSSARY’作成の苦労話は『年報』第30号に載せました。あわせてお読みください。)